



表2 100万円を投下した場合の元利合計金額一覧(2)

Table with columns for year, interest rate change, and total amount for two scenarios (銘柄C and 銘柄D).

表3 100万円を投下した場合の元利合計金額一覧(3)

Table with columns for year, interest rate change, and total amount for three scenarios (銘柄E).

表1をごらんいただきたい。5%ごとのアップダウンを繰り返していった銘柄Aは、当初元本100万円が10年後には98万7600円...

ここで気づいていただきたいことは2つ。1つは「毎年のアップダウンを足し合わせた結果の単純平均値と実際のパフォーマンスとは、明らかに異なる」ということだ。これは「ある会社の売り上げが毎年、5%アップ、5%ダウンを繰り返していき、売上金額自体はほとんど減っていく」ということだ。

今度のは単純にプラスマイナスを足し合わせていけば10年間で50%のプラスになる事例だ。さてどうか。ここまで論旨をたどってこれた多くの読者のなかでも「思いのほか儲かっている」となるのだろうか、まさかマイナスにはなるまい」と直感される方が多いのではないかと。だが残念、表3に見るとおり、すなわち、10年後には100万円の元手は戻ってこないのだ。

表1 100万円を投下した場合の元利合計金額一覧(1)

Table with columns for year, interest rate, and total amount for four scenarios (銘柄A 5%, 10%, 銘柄B 20%, 30%).

(注)それぞれの変動率を1年目はプラス、2年目はマイナスと交互に繰り返した場合

投資の世界に遊んだ結果、「こんなはずじゃなかった」という思いを味わいたくないなら、数理に関する最低限の常識は必要だ。とは言っても微分、積分に長けなければならぬ...

これに対して銘柄Bは1年ごとに20%上昇、20%下落という動きを繰り返す。さて、A、Bそれぞれに100万円を投じたとすれば、10年後の元利合計金額はどちらが多いか。あるいはどちらも同じか? さてどうだろう。ちょっとだけ捕捉しておくならば、以上のような「行ったり来たり」の動きを繰り返すことをファンドマネジャーなど専門家は「テレコで動く」と表現する。

このテーマについては即答を期待したいところだが、多分お分かりにならない方が多いのではないかと。即答できないのが平均、だと思えたい。私の周りのFP(ファイナンシャルプランナー)を含む金融機関職員の方々に問うたところ、5人に4人は考え込んでしまい、すぐには結論を下せなかった。

投資のツボ

マクロ経済データを投資に生かす法

長期ではハイリスク・ハイリターン運用が不利である理由

その10

もうひとつのポイントがA、Bともに1年ごとの上昇率、下落率を足し合わせれば、ゼロになるということ。これを算術平均はともかく、幾何平均はどうか?

単純平均で通期のパフォーマンス計算はできない